

ヘルスコミュニケーション学記念セミナー

祝！がんコミュニケーション学
連携講座設立

—人間コミュニケーション学と医療の
統合への期待と挑戦—

西南学院大学文学部 教授 宮原 哲

2018年7月29日

「コミュニケーション力」を取り巻く環境

大切とされる「コミュニケーション力」だが、誤解が多い

代表的な誤解

- コミュニケーション＝スキル → 医療現場では「接遇」が大事
- そのうちうまく「なる」
- 日本人（同僚、家族...）だから「言わなくてもわかってもらえる」
- 日本のお家芸「おもてなし」は世界で通じる

「コミュニケーション」の環境は大変化

- 「グローバル化」: 文化的背景が異なる人との関係が日常化
- デジタル時代、誰もが情報発信
- 言語使用能力の衰退
- サービス過剰が生むモンスター！

「医療」を取り巻く環境の変化

- パターナリスティックな医療の翳り
- 空前の健康ブーム
- 医療情報の氾濫
- 患者の消費者意識の台頭、モンスターの出現

医療コミュニケーションの変遷

- 1972年: ICA(International Communication Association)がヘルスケア、ヘルスプロモーションに関心を持つ、多様な領域の研究者の増加を認識し、Therapeutic Communication 分科会を設置
- 1975年: ICA が正式にHealth Communication Divisionの設立を承認
- 1985年: SCA(Speech Communication Association,現在のNCA=National Communication Association)で健康、医療、保健衛生に関する研究の「機が熟した」として、Commission for Health Communication を設置
- 1997年: the American Public Health Association が、ヘルスコミュニケーションをPublic Health Education and Health Promotionの一環として正式承認

国内の動向

- 1971年：太平洋コミュニケーション学会（現在の日本コミュニケーション学会）設立
- 異文化コミュニケーション、レトリック、英語教育が代表的な研究領域
- 日本聯合医学会（現在の日本医学会）、日本内科学会等、1900年初頭から活動
- 医心方（丹波康頼、984）、養生訓（貝原益軒、1712）—「医は仁術」

誕生、日本ヘルスコミュニケーション学会！

- 2009年、東京大学で「医療系大学等におけるヘルスコミュニケーション教育—現状及びその意義と役割」のテーマで第1回目開催
- 以降、京都、九州、慶応義塾、岐阜、広島、西南学院、国立がん研究センターで開催
- テーマは「マクロ的」(例：災害、メディア、教育)な視点から、「ミクロ的」(例：対人、共創、わかり合い)へ展開、今年(第10回目)は「国際化」

医療とコミュニケーションの関係

- コミュニケーション > 医療

- ✓ 人間だけが持つ「時間を超越する力」= 過去を振り返り、未来に思いを馳せ、現在の行動を考える「ゴール設定力」
- ✓ 共感力、モデリング = 病気の人を見たり、話を聞き、自分に置き換える、辛い状態の人への思いやり
- ✓ 知識、経験を持つ者 ⇔ 持たない者の役割分担
- ✓ 医学の研究も実践もコミュニケーション行動の「産物」
- ✓ 病院という組織を築き、維持、発展させるのもコミュニケーション行動
- ✓ 患者は外部営業、病院職員は内部顧客

医療コミュニケーション＝ 異文化コミュニケーション

- 医療者と患者
- グローバル社会
- 医療者同士
- 地域差、性差、年齢差も「異文化」

今後必要とされる展開

- 研究、教育、実践の統合
- 東京大学・国立がん研究センター共同：
がんコミュニケーション学 連携講座への期待